



成人向

おとなたちのおもちゃ 1

音無小○



某アイドル事務所で事務をこなす音無小○は  
明日の休みを満喫するために、普段は行く機会もない  
マツサージ店を訪れていた。  
「こういう場所初めてで……」  
「初めてのの方はたくさんいらっしゃいますよ」  
マツサージ師の男は小○の肩を揉みつつ穏やかに  
言った。



「ちよつ…えつえつ!」  
マッサージ師の男はさも当然のような動作で  
小○の服のボタンを外し、胸を露出させた。  
「身体の血の巡りを助けるのに効果的なんですよ」  
「そう言いながら、小○の胸を大胆に揉みしだく。」  
「そ…そうなん…ですか…」  
小○はそう言っただけで、珍妙な体勢で固まる  
しかなかった。



「身体少し捻りますよー…よっ…ほっ」  
小○の身体を後ろから抱きかかえるようにして  
ストレッチらしきことをしている。  
「事務仕事だと、この辺の筋肉も固まっちゃうんです  
よねー」  
そう言いながら小○の尻や股を遠慮なく触る。  
「こうすると…よっ…この辺伸びてきませんか？」  
「で…そう…ですね、あは…あはは」



「こつてますね〜」  
そう言いながら尻を掌で力強くマッサージ  
している。  
「あ…あの、スカートが…」  
「布の厚みで正確な筋肉の位置が把握しづらい  
んですよ〜」  
「は、はあ…」  
マッサージなど受けたこともなく、こういうもの  
だと納得するしかない。



「あ…あの、そこはちよつと…」  
「全身の筋肉の配置を意識してほぐして  
いかなきゃいけないんですよ」  
「でっ…でも」  
「マッサージ師の男はあまりに堂々と局部を触ってくる。  
初めてで慣れないとは思いますが、決して  
いやらしいことではありませんから」  
「自分が意識し過ぎなのかと小○は思ったが  
慣れないものは慣れない」  
「だが、力も弱い彼女はただ我慢してマッサージが終わるのを  
待つしかなかった。」



「中からもマッサージしていきましょね」  
「そう言つて、小○の女性器の中へ太い指を  
グイグイとねじ込んでくる。  
「ちよつときつつかないかな」  
「……んっ……んっ」  
「ほら、ここがツボですよ」  
「男が小○の中でグイツと指を折り曲げた。  
「あっ！」  
小○の身体が思わず跳ねた。



「やわらかいもので刺激していきますね」  
そう言ったマツサーン師の男は  
小○の腰を持ち上げ舌を突き出して  
彼女の股間に顔を押し付けた。  
「えっ！ちよつ」  
驚く彼女を尻目に、男は目の前にある  
女性器に入念に舌を這わせた。





「口の中にもツボがありますので、刺激していきますよ」  
「そ…それ…んむっ」  
「マッサージ師の男は股間から勃起した男性器を取り出し  
小○の口にねじ込んだ」  
「んんんっ」  
「小○の頭を抱え、喉の奥に男性器を何度もぶつける。  
「おっっっ」  
そして最後には、その喉の奥に精液を注ぎ込んだ。  
「こうすることで治療の効果が高まりますからね」  
「がんばって飲んでくださいね」

「指では届かない位置にツボがありますからね〜  
長いもので刺激していきますよ〜」  
「ちよつ…何を!」  
マツサージ師の男は遠慮なく男性器を小○の膣の中へ  
押し込む。  
マツサージによつてほぐされた小○の身体は、穴よりも  
明らかに大きい男の男性器をゆつくりと飲み込んでいく。  
「かっ…はっ」  
小○は苦しきから上手く息ができないでいるが、男は  
構わず体を前後させ穴を刺激した。  
そしてその奥でも遠慮なく射精を繰り返した。



「こちらにもツボがありますからね」  
ちよつとほぐしておきますね」  
そう言いながら、小○の尻の穴に指を突っ込み  
グリグリと穴を広げるような動きを始めた。  
「そう……なんですか……んっ……んっ」  
小○は今にも逃げ出したい気持ちだったが  
マツサージ師の太い腕が彼女の腰をがっしりと  
掴み、とてもそんなことをできそうな状況では  
無いことを彼女でも理解できた。



身体の小さい彼女を抱きかかえるようにして  
マッサージ師の男は小○のアナルを刺激し続ける。  
「おっおっおっ……!!」  
「突きする度に小○が尿を漏らして床を濡らして  
しまう。」  
「おしっこっ……がっ……あっあっ!!」  
「大丈夫ですよ、正常な反応ですから」



「もう…やめ…てえ…んんんっ」  
「きちんと正しい手順を踏まないとな」  
「マッサージの効果が無いですよ」  
「そう言うって、マッサージ器具を小○の女性器に  
押し付ける。」  
「小○は幾度となく絶頂し、マッサージ師の男も  
幾度となく射精を繰り返した。」



マツサージを受け続けるうちに  
小○は意識を失っていた。

次に目覚めた時、彼女の服や下着は  
きちんと整った状態になっていた。  
自分に起こったことがあまりに現実離れ  
しており、自分の妄想癖が来るところまで  
来てしまったのでは...と考えてしまった。  
「お客さん、そろそろ閉店の時間なので...」  
「はいはい、すみません」  
「は、はい、夢だったのかしら...そう考えたまま  
小○はマツサージ店を出た。」



某アイドル事務所で事務をこなす音無小○は  
明日の休みを満喫するために、普段は行く機会もない  
マツサージ店を訪れていた。  
「こういう場所初めてで……」  
「初めてのの方はたくさんいらつしやいますよ」  
マツサージ師の男は小○の肩を揉みつつ穏やかに  
言った。



「ちよつ…えつえつ!」  
マツサージ師の男はさも当然のような動作で  
小○の服のボタンを外し、胸を露出させた。  
「身体の血の巡りを助けるのに効果的なんですよ」  
「そう言いながら、小○の胸を大胆に揉みしだく。」  
「そ…そうなん…ですか…」  
小○はそう言っただけで、珍妙な体勢で固まる  
しかなかった。



「身体少し捻りますよー…よっ…ほっ」  
小○の身体を後ろから抱きかかえるようにして  
ストレッチらしきことをしている。  
「事務仕事だと、この辺の筋肉も固まっちゃうんです  
よね」  
そう言いながら小○の尻や股を遠慮なく触る。  
「こうすると…よっ…この辺伸びてきませんか？」  
「そ…そう…ですね、あは…あはは」



「こつてますね〜」  
「そう言いながら尻を掌で力強くマッサージ  
している。」  
「あ…あの、スカートが…」  
「布の厚みで正確な筋肉の位置が把握しづらい  
んですよ〜」  
「は、はあ…」  
「マッサージなど受けたこともなく、こういうもの  
だと納得するしかない。」



「あ…あの、そこはちよつと…」  
「全身の筋肉の配置を意識してほぐして  
いかなきゃいけないんですよ」  
「でっ…でも」  
「マッサージ師の男はあまりに堂々と局部を触ってくる。  
初めてで慣れないとは思いますが、決して  
いやらしいことではありませんから」  
「自分が意識し過ぎなのかと小○は思ったが  
慣れないものは慣れない」  
「だが、力も弱い彼女はただ我慢してマッサージが終わるのを  
待つしかなかった。」



「中からもマッサージしていきましょね」  
「そう言つて、小○の女性器の中へ太い指を  
グイグイとねじ込んでくる。  
「ちよつときついかな」  
「……んっ……んっ」  
「ほら、ここがツボですよ」  
「男が小○の中でグイツと指を折り曲げた。  
「あっ！」  
小○の身体が思わず跳ねた。



「やわらかいもので刺激していきますね」  
そう言ったマツサーン師の男は  
小○の腰を持ち上げ舌を突き出して  
彼女の股間に顔を押し付けた。  
「えっ！ちよつ」  
驚く彼女を尻目に、男は目の前にある  
女性器に入念に舌を這わせた。





「口の中にもツボがありますので、刺激していきますよ」  
「そ…それ…んむうっ!」  
「マッサージ師の男は股間から勃起した男性器を取り出し  
小○の口にねじ込んだ。」  
「んんんっ!」  
「小○の頭を抱え、喉の奥に男性器を何度もぶつける。  
「おっっえっっ」  
そして最後には、その喉の奥に精液を注ぎ込んだ。  
「こうすることで治療の効果が高まりますからね」  
「がんばって飲んでくださいね」

「指では届かない位置にツボがありますからね〜  
長いもので刺激していきますよ〜」  
「ちよつ…何を!」  
マツサージ師の男は遠慮なく男性器を小○の膣の中へ  
押し込む。  
マツサージによつてほぐされた小○の身体は、穴よりも  
明らかに大きい男の男性器をゆつくりと飲み込んでいく。  
「かつ…はっ」  
小○は苦しきから上手く息ができないでいるが、男は  
構わず体を前後させ穴を刺激した。  
そしてその奥でも遠慮なく射精を繰り返した。



「こちらにもツボがありますからね」  
ちよつとほぐしておきますね」  
そう言いながら、小○の尻の穴に指を突っ込み  
グリグリと穴を広げるような動きを始めた。  
「そう……なんですか……んっ……んっ」  
小○は今にも逃げ出したい気持ちだったが  
マツサージ師の太い腕が彼女の腰をがっしりと  
掴み、とてもそんなことをできそうな状況では  
無いことを彼女でも理解できた。



身体の小さい彼女を抱きかかえるようにして  
マッサージ師の男は小○のアナルを刺激し続ける。  
「おっおっおっ……!!」  
「突きする度に小○が尿を漏らして床を濡らして  
しまう。」  
「おしっこっ……がっ……あっあっ!!」  
「大丈夫ですよ、正常な反応ですから」



「もう…やめ…てえ…んんんっ」  
「きちんと正しい手順を踏まないとな」  
「マッサージの効果が無いですよ」  
「そう言うって、マッサージ器具を小○の女性器に  
押し付ける。」  
「小○は幾度となく絶頂し、マッサージ師の男も  
幾度となく射精を繰り返した。」



マツサージを受け続けるうちに  
小○は意識を失っていた。

次に目覚めた時、彼女の服や下着は  
きちんと整った状態になっていた。  
自分に起こったことがあまりに現実離れ  
しており、自分の妄想癖が来るところまで  
来てしまったのでは...と考えてしまった。  
「お客さん、そろそろ閉店の時間なので...」  
「はいはい、すみません」  
「は、はい、夢だったのかしら...そう考えたまま  
小○はマツサージ店を出た。」



某アイドル事務所で事務をこなす音無小○は  
明日の休みを満喫するために、普段は行く機会もない  
マツサージ店を訪れていた。  
「こういう場所初めてで……」  
「初めてのの方はたくさんいらっしゃいますよ」  
マツサージ師の男は小○の肩を揉みつつ穏やかに  
言った。



「ちよつ…えつえつ!」  
マツサージ師の男はさも当然のような動作で  
小○の服のボタンを外し、胸を露出させた。  
「身体の血の巡りを助けるのに効果的なんですよ」  
「そう言いながら、小○の胸を大胆に揉みしだく。」  
「そ…そうなん…ですか…」  
小○はそう言っただけで、珍妙な体勢で固まる  
しかなかった。



「身体少し捻りますよー…よっ…ほっ」  
小○の身体を後ろから抱きかかえるようにして  
ストレッチらしきことをしている。  
「事務仕事だと、この辺の筋肉も固まっちゃうんです  
よねー」  
そう言いながら小○の尻や股を遠慮なく触る。  
「こうすると…よっ…この辺伸びてきませんか？」  
「そ…そう…ですね、あは…あはは」



「こつてますね〜」  
そう言いながら尻を掌で力強くマッサージ  
している。  
「あ…あの、スカートが…」  
「布の厚みで正確な筋肉の位置が把握しづらい  
んですよ〜」  
「は、はあ…」  
マッサージなど受けたこともなく、こういうもの  
だと納得するしかない。



「あ…あの、そこはちよつと…」  
「全身の筋肉の配置を意識してほぐして  
いかなきゃいけないんですよ」  
「でっ…でも」  
「マッサージ師の男はあまりに堂々と局部を触ってくる。  
初めてで慣れないとは思いますが、決して  
いやらしいことではありませんから」  
「自分が意識し過ぎなのかと小○は思ったが  
慣れないものは慣れない」  
「だが、力も弱い彼女はただ我慢してマッサージが終わるのを  
待つしかなかった。」



「中からもマッサージしていきましようね」  
そう言つて、小○の女性器の中へ太い指を  
グイグイとねじ込んでくる。  
「ちよつときついかな」  
「……んっ……んっ」  
「ほら、ここがツボですよ」  
男が小○の中でグイツと指を折り曲げた。  
「あっ！」  
小○の身体が思わず跳ねた。



「やわらかいもので刺激していきますね」  
そう言ったマツサージ師の男は  
小○の腰を持ち上げ舌を突き出して  
彼女の股間に顔を押し付けた。  
「えっ！ちよつ」  
驚く彼女を尻目に、男は目の前にある  
女性器に入念に舌を這わせた。





「口の中にもツボがありますので、刺激していきますよ」  
「そ…それ…んむっ」  
「マッサージ師の男は股間から勃起した男性器を取り出し  
小○の口にねじ込んだ」  
「ん…んっ」  
「小○の頭を抱え、喉の奥に男性器を何度もぶつける。  
「おっっっ」  
そして最後には、その喉の奥に精液を注ぎ込んだ。  
「こうすることで治療の効果が高まりますからね」  
「がんばって飲んでくださいね」

「指では届かない位置にツボがありますからね〜  
長いもので刺激していきますよ〜」  
「ちよつ…何を!」  
マツサージ師の男は遠慮なく男性器を小○の膣の中へ  
押し込む。  
マツサージによつてほぐされた小○の身体は、穴よりも  
明らかに大きい男の男性器をゆつくりと飲み込んでいく。  
「かっ…はっ」  
小○は苦しきから上手く息ができないでいるが、男は  
構わず体を前後させ穴を刺激した。  
そしてその奥でも遠慮なく射精を繰り返した。



「こちらにもツボがありますからね」  
ちよつとほぐしておきますね」  
そう言いながら、小○の尻の穴に指を突っ込み  
グリグリと穴を広げるような動きを始めた。  
「そう……なんですか……んっ……んっ」  
小○は今にも逃げ出したい気持ちだったが  
マツサージ師の太い腕が彼女の腰をがっしりと  
掴み、とてもそんなことをできそうな状況では  
無いことを彼女でも理解できた。



身体の小さい彼女を抱きかかえるようにして  
マッサージ師の男は小○のアナルを刺激し続ける。  
「おっおっおっ……!!」  
「突きする度に小○が尿を漏らして床を濡らして  
しまう。」  
「おしっこっ……がっ……あっあっ!!」  
「大丈夫ですよ、正常な反応ですから」



「もう…やめ…てえ…んんんっ」  
「きちんと正しい手順を踏まないとな」  
「マッサージの効果が無いですよ」  
「そう言うって、マッサージ器具を小○の女性器に  
押し付ける。」  
「小○は幾度となく絶頂し、マッサージ師の男も  
幾度となく射精を繰り返した。」



マツサージを受け続けるうちに  
小○は意識を失っていた。

次に目覚めた時、彼女の服や下着は  
きちんと整った状態になっていた。  
自分に起こったことがあまりに現実離れ  
しており、自分の妄想癖が来るところまで  
来てしまったのでは...と考えてしまった。  
「お客さん、そろそろ閉店の時間なので...」  
「はいはい、すみません」  
「は、はい、夢だったのかしら...そう考えたまま  
小○はマツサージ店を出た。」



某アイドル事務所で事務をこなす音無小○は  
明日の休みを満喫するために、普段は行く機会もない  
マツサージ店を訪れていた。  
「こういう場所初めてで……」  
「初めてのの方はたくさんいらっしゃいますよ」  
マツサージ師の男は小○の肩を揉みつつ穏やかに  
言った。



「ちよつ…えつえつ!」  
マツサージ師の男はさも当然のような動作で  
小○の服のボタンを外し、胸を露出させた。  
「身体の血の巡りを助けるのに効果的なんですよ」  
「そう言いながら、小○の胸を大胆に揉みしだく。」  
「そ…そうなん…ですか…」  
小○はそう言っただけで、珍妙な体勢で固まる  
しかなかった。



「身体少し捻りますよー…よっ…ほっ」  
小○の身体を後ろから抱きかかえるようにして  
ストレッチらしきことをしている。  
「事務仕事だと、この辺の筋肉も固まっちゃうんです  
よねー」  
そう言いながら小○の尻や股を遠慮なく触る。  
「こうすると…よっ…この辺伸びてきませんか？」  
「そ…そう…ですね、あは…あはは」



「こつてますね〜」  
そう言いながら尻を掌で力強くマッサージ  
している。  
「あ…あの、スカートが…」  
「布の厚みで正確な筋肉の位置が把握しづらい  
んですよ〜」  
「は、はあ…」  
マッサージなど受けたこともなく、こういうもの  
だと納得するしかない。



「あ…あの、そこはちよつと…」  
「全身の筋肉の配置を意識してほぐして  
いかなきゃいけないんですよ」  
「でっ…でも」  
「マッサージ師の男はあまりに堂々と局部を触ってくる。  
初めてで慣れないとは思いますが、決して  
いやらしいことではありませんから」  
「自分が意識し過ぎなのかと小○は思ったが  
慣れないものは慣れない」  
「だが、力も弱い彼女はただ我慢してマッサージが終わるのを  
待つしかなかった。」



「中からもマッサージしていきましようね」  
そう言つて、小○の女性器の中へ太い指を  
グイグイとねじ込んでくる。  
「ちよつときついかな」  
「……んっ……んっ」  
「ほら、ここがツボですよ」  
男が小○の中でグイツと指を折り曲げた。  
「あっ！」  
小○の身体が思わず跳ねた。



「やわらかいもので刺激していきますね」  
そう言ったマツサーン師の男は  
小○の腰を持ち上げ舌を突き出して  
彼女の股間に顔を押し付けた。  
「えっ！ちよつ」  
驚く彼女を尻目に、男は目の前にある  
女性器に入念に舌を這わせた。





「口の中にもツボがありますので、刺激していきますよ」  
「そ…それ…んむっ」  
「マッサージ師の男は股間から勃起した男性器を取り出し  
小○の口にねじ込んだ」  
「んんんっ」  
「小○の頭を抱え、喉の奥に男性器を何度もぶつける。  
「おっっっ」  
そして最後には、その喉の奥に精液を注ぎ込んだ。  
「こうすることで治療の効果が高まりますからね」  
「がんばって飲んでくださいね」

「指では届かない位置にツボがありますからね〜  
長いもので刺激していきますよ〜」  
「ちよつ…何を!」  
マツサージ師の男は遠慮なく男性器を小○の膣の中へ  
押し込む。  
マツサージによつてほぐされた小○の身体は、穴よりも  
明らかに大きい男の男性器をゆつくりと飲み込んでいく。  
「かつ…はっ」  
小○は苦しきから上手く息ができないでいるが、男は  
構わず体を前後させ穴を刺激した。  
そしてその奥でも遠慮なく射精を繰り返した。



「こちらにもツボがありますからね」  
ちよつとほぐしておきますね」  
「そう言いながら、小○の尻の穴に指を突っ込み  
グリグリと穴を広げるような動きを始めた。  
「そう……なんですか……んっ……んっ」  
小○は今にも逃げ出したい気持ちだった  
が、マツサージ師の太い腕が彼女の腰をがっしりと  
掴み、とてもそんなことをできそうな状況では  
無いことを彼女でも理解できた。





「もう…やめ…てえ…んんんっ」  
「きちんと正しい手順を踏まないとな」  
「マッサージの効果が無いですよ」  
「そう言うって、マッサージ器具を小○の女性器に  
押し付ける。」  
「小○は幾度となく絶頂し、マッサージ師の男も  
幾度となく射精を繰り返した。」



マツサージを受け続けるうちに  
小○は意識を失っていた。

次に目覚めた時、彼女の服や下着は  
きちんと整った状態になっていた。  
自分に起こったことがあまりに現実離れ  
しており、自分の妄想癖が来るところまで  
来てしまったのでは...と考えてしまった。  
「お客さん、そろそろ閉店の時間なので...」  
「はいはい、すみません」  
「は、はい、夢だったのかしら...そう考えたまま  
小○はマツサージ店を出た。」



















































































